

# 感染症対策下のわらべうた遊び

明星大学教育学部教育学科 特任准教授 松 井 いずみ

## Playing WARABEUTA with Countermeasures against Infectious Diseases

Izumi MATSUI

キーワード：わらべうた 保育 感染症対策

### 1. はじめに

2019年からの新型コロナウイルス感染症 COVID19の流行は、音楽教育においても大きな影響を及ぼした。文部科学省からは、手洗いや咳エチケット、換気といった基本的な感染症対策に加え、感染拡大リスクが高い「3つの密」を徹底的に避けるために、身体的距離の確保といった「新しい生活様式」に学校を含めた社会全体が移行することが不可欠であるとした上で、「音楽科において、狭い空間や密閉状態での歌唱指導や身体の接触を伴う活動について、年間指導計画の中で指導の順序を変更することや、歌う際にはできる限り一人一人の間隔を空け、人がいる方向に口が向かないようすること」<sup>1</sup>といった指針が示された。また、「感染症対策を講じてもお感染のリスクが高い学習活動」として、「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」<sup>2</sup>が挙げられた。そのような中、「学習支援コンテンツポータルサイト(子供の学び応援サイト)」<sup>3</sup>には、オンラインを利用した音楽教員を支援する資料や、子どもたちも学ぶことができる動画やワークシート等が紹介された。音楽の教科書掲載楽曲について、作者からのメッセージの動画紹介、自宅でリコーダーの練習ができる「リコーダーの家庭学習用デジタル教材(ヤマハ)」、郷土の音楽、世界の音楽、作曲家等について子どもたちにわかりやすく説明している「音楽しらべ隊(教育芸術社)」など、限られた環境の中で、ICTを活用し、子どもたちが楽しく音楽に触れることができるよう配慮されたものである。

一方、感染症拡大防止のために幼稚園等が休園時に行っていた取り組み内容「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集令和2年5月13日時点」<sup>4</sup>では、コロナ禍以前に子どもたちが園で踊っていた曲のCDを園児宅に郵送したり、手遊び・ダンス・季節の歌などの動画配信を行ったという事例が報告された。更に、担任と子どもたちがクラスのつながりを感じることができるよう、Zoom<sup>5</sup>でクラスのあつまりを行ない、歌を歌うなどオンラインでできるコミュニケーションを実施した園や、Google Meet<sup>6</sup>を用いたオンライン保育を実施し、お遊戯などに同時双方向で取り組んだ園もあり、ICTを活用した音楽活動が行われた園もあったことがわかる。

### 2. 感染症対策下のわらべうた遊び

わらべうたは遊びを伴う音楽であり、子どもたちにとって歌いやすい音域や自然なリズムでできているため、保育の音楽活動に適していると言える。わらべうたの音楽的意義については、「わらべうたを使用した音楽表現活動の提案—保育を学ぶ学生らと共に—」<sup>7</sup>に記した通り、日本人の根底に流れる伝統的な音階でできていること、歌と遊びが一体となっていること、近年の少子化、ICT化、都市化による遊び場の減少、核家族化による世代間の触れ合いの減少など、さまざまな理由からわらべうたが見直されている

ことなどが挙げられる。また、わらべうた遊びそのものに、音楽的意義のみならず保育の5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の全般にわたる内容がふんだんに含まれていると言える。

幼稚園教諭のための音楽活動をテーマとする研修会の講師を務めた際に、わらべうた遊びを取り入れたところ、研修会に参加した保育者から、「人の肌に触れる遊び、ふれあい遊びをもっと保育に入れていきたい。」といった感想を多くいただいた。また、保育を学ぶ学生らに、「わらべうたで遊んだことはありますか。誰と遊びましたか。」という質問をしたところ、「幼児期に友だちと遊んだ」「保育者」「母親」「姉や兄」「祖母、親戚」といった回答があり、更には、高校生になってからも体育の待ち時間などに遊んでいたという学生も存在した。わらべうた遊びの良いところのひとつとして、世代を超えて触れ合いながら遊べる事が挙げられるだろう。

しかし新型コロナウイルス感染症の流行により、触れ合いの少ない遊び歌を選択する必要が生じるようになった。一人で遊べる、または比較的触れ合いの少ないわらべうた遊びとしては、一般的に、子どもが一人で遊ぶ、「手あそび」、「指あそび」、「道具を使ったあそび(まりつき)(縄跳び)(羽根つき)(お手玉)など」、「しぐさあそび」、「じゃんけん」、「表情あそび」などが挙げられる。また、子ども同士手をつながずに歩く「連なり歩き」、「役交代あそび」も工夫次第では感染症対策を行った上で楽しむことができるだろう。

一方、避けた方が良いわらべうたは、顔や手、身体を触って遊ぶ「顔あそび」、「腕あそび」、「ゆらしあそび」、「膝のせあそび」、「おんぶ」、「人持ちあそび」、「足のせあそび」、「くすぐりあそび」、「鬼ごっこ」、「手合わせ」や、至近距離で歌う(見せる)「あやしあそび」、「おまじない」、「鬼きめ」、「銭まわし」、「おしくらまんじゅう」、そして、子ども同士または大人と子どもが手をつないで遊ぶ「舟こぎ」、「手車」、「隊列あそび」、「門くぐり」などが挙げられる。

その上で、松井(2020)<sup>8</sup>が行った、保育を学ぶ学生らのわらべうた認知度調査の上位にあがったわらべうた20曲を分類すると次の通りになる。

〈触れ合いの少ない、または一人で遊ぶわらべうた〉

「あんたがたどこさ」「げんこつやまのたぬきさん」「ちゃちゃつぼ」「でんでらりゅうぼ」「だるまさん」「てるてるぼうず」

〈触れ合いの多いわらべうた〉

「はないちもんめ」「ゆびきりげんまん」「おしくらまんじゅう」「かごめかごめ」「お寺のおしょうさん」「ずいずいづっころぼし」「おちゃらか」「なべなべそこぬけ」「おせんべ」「いっぽんぼしこちょこちょ」「とおりゃんせ」「あぶくたつた」「ひらいたひらいた」「じゅうごやさんのもちつき」

「あんたがたどこさ」は、一人で遊ぶ「まりつき」として分類したが、2人組で近い距離で向かい合い、左右にジャンプしながら歌い、「さ」の部分で前後にジャンプする遊び方もある。その場合には、非常に近距離で歌い合い、正面からぶつかる可能性があることを楽しむ遊びであるため、感染症対策下の遊びには適していないと言える。「でんでらりゅうぼ」は、早口を楽しむ唱え歌であるが、指を動かす遊び方もあるため、一人で遊ぶ「指あそび」として分類をした。「ひらいたひらいた」は、両手で花のような形を作って遊ぶこともできるが、大勢で手をつなぎ輪を作って遊ぶこともできるため、触れ合いの多い方へ分類をした。

このように、同じ歌にもいくつかの遊び方をもつわらべうたが多数存在している。世界各地の民族音楽や音楽文化を調査・研究した小泉(1986)は「七年前に簡単な調査をした時と比べると、六年間のうちに、わらべうたの世界が、ガラガラと変わってしまいました。七年前にたくさんうたわれていた『月、火、水、木』は誰も知らなくなり、その代わりに『かぼちゃの種を蒔きました。芽が出てふくらんで、花が咲いて、じゃんけんぽん』というのができているのです。こういうふうに、どんどん変わっています。また東京の狭い路地ごとにみんな違うやり方をしているのです。そしてこれが、本当のわらべうたです。」<sup>9</sup>「わらべ

うたは変わった。これからも変わるでしょう。子どもに与える音楽的環境に支配もされるでしょう。」<sup>10</sup>と述べている。同じわらべうたに幾通りもの遊び方があるのは、ごく自然なこととも言えるだろう。

### 3. わらべうた遊びのアレンジ

感染症対策として、保育の現場では朝やおかえり時などの生活の歌を中止した園や、歌うこと自体を全て中止した園もあるが、そのような状況下においても、子どもたちの中には音楽が息づいており、乳児が保育者に「歌って」とせがむという声も聞く。また、コロナ禍以前からわらべうたを多く扱っていた園では、わらべうたの多くが大勢で声を合わせて大きな声で歌うものではないため、コロナ禍においてもマスクの下で変わらず歌われていると教えていただいた。

そこで、触れ合いの多いわらべうたにおいて、直接触れ合うことはできなくても目と目を合わせ、心を通わせることのできる遊び方を提案することはできるのではないかと考え、保育を学ぶ学生らに対して、感染症対策をテーマとし、わらべうたの遊び方をアレンジする提案をした。学生らも自粛生活で、オンラインによる学びの中、様々なアイデアが寄せられた。

#### (1) 学生たちの遊び方アレンジ例

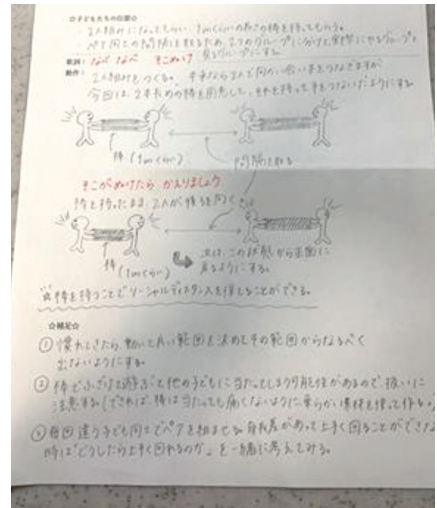
##### 例1 「なべなべ」

###### 〈一般的な遊び方〉

かやりあそび：2人組で向かい合い両手をつなぐ。うたに合わせてつないだ手を左右に振り、「かえりましょ」で手をつないだまま互いに体を半回転させて背中合わせになる。2回目は背中合わせのまま手を左右に振り、1回目と同様にうたの終わりで手をつないだまま半回転し、元に戻る。<sup>11</sup>

###### 〈学生の遊び方アレンジ案〉

2人組になり両手にそれぞれ1m程度の棒を持ち、一般的な「なべなべ」と同じように左右に振り、棒を持ったまま体を半回転させて背中合わせになる。スペースを確保するため、遊ぶ子どもと、それを見る子どもの2グループに分ける。棒はやわらかい素材を使って作る。慣れてきたら、違う子ども同士のパアを作る。身長差があつてうまく回れない時には、どうしたらうまくいくのか子どもたちと考える。



【写真1. 「なべなべ」】

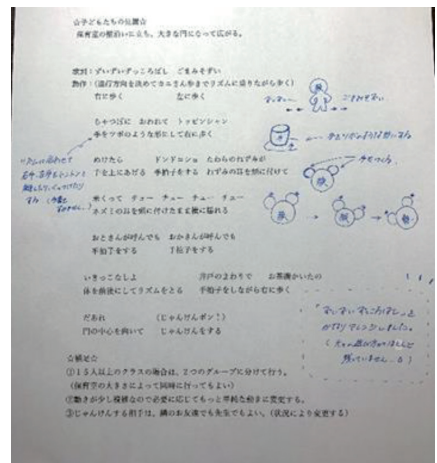
##### 例2 「ずいずいずっころばし」

###### 〈一般的な遊び方〉

鬼決め：鬼を決める人が一人。それ以外の人は円を作って内側を向いて立ち、手を握って前に出す。鬼を決める人は円の内側に入り、ひとつひとつのこぶしを数えるように人差し指で触りながら、反時計回りで進む。休符の前では一旦止まり、休符のところは動かない。うたの最後でこぶしを触られた人が鬼になる。<sup>12</sup>

###### 〈学生の遊び方アレンジ案〉

子どもたちは保育室の壁沿いに立ち、なるべく大きな円を作り、次のように動く。



【写真2. 「ずいずいずっころばし」】

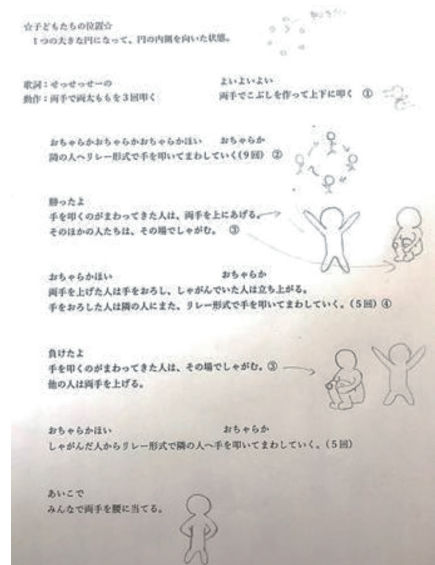
- 歌詞：ずいずいずっころばし ごまみそずい  
 (カニ歩きで右へ4歩) (カニ歩きで左へ4歩)
- 歌詞：ちゃつぽにおわれてとっぴんしゃん  
 (右手でつぽ、左手で受け皿を作り、トントンと離したりくっつけたりする。)
- 歌詞：ぬけたら どんどこしょ  
 (両手を上にあげる。) (手拍子を3回)
- 歌詞：たわらのねずみが  
 (両手を頭に付けねずみの耳を作る。)
- 歌詞：こめくってチュー チューチューチュー  
 (ねずみの耳を作ったまま左右に揺れる。)
- 歌詞：おとさんがよんでも おかさんがよんでも  
 (手拍子を3回) (手拍子を3回)
- 歌詞：いきっこなしよ  
 (体を前後に揺する。)
- 歌詞：いどのまわりでおちゃわんかいたの だあれ  
 (手拍子をしながら右に歩く。) (円の内側を向く。)  
 (最後にジャンケンをする。)

例3 「おちゃらか」

〈一般的な遊び方〉

2人組になって向かい合う

- 歌詞：せっせっせの  
 (両手をつなぎ、拍に合わせて上下に軽く振る。)
- 歌詞：よいよいよい  
 (手をつないだまま交差させる。)
- 歌詞：おちゃらか おちゃらか おちゃらか  
 (手合わせ)左手は手のひらを上に向け、動かさない。  
 右手は、自分の左手のひらと相手の左手のひらを交互にたたく。
- 歌詞：ほい おちゃらか  
 (じゃんけんをする。)(手合わせ)  
 「勝ったよ」……腕を上にあげて「ばんざい」の姿勢。  
 「負けたよ」……頭を下げる。  
 「あいこで」……腰に手をあてる。<sup>13)</sup>



【写真3. 「おちゃらか」】

〈学生の遊び方アレンジ案〉

- 歌詞：せっせっせの よいよいよい  
 (両手で太ももを3回たたく。)(両手でこぶしを作って上下に叩き合わせる。)
- 歌詞：おちゃらか おちゃらか おちゃらか ほい おちゃらか  
 (リレー形式で1回ずつ手を叩き、隣りの人へ回していく。〔9回〕)
- 歌詞：勝ったよ  
 (手を叩く順番が回ってきた人は、両手を高く上げる。他の人は全員座る。)
- 歌詞：おちゃらか ほい おちゃらか  
 (リレー形式で1回ずつ手を叩き、隣りの人へ回していく。〔5回〕)



歌詞：負けたよ

(手を叩く順番が回ってきた人は座る。他の人は全員両手を高く上げる。)

歌詞：おちゃらか ほう おちゃらか

(リレー形式で1回ずつ手を叩き、隣りの人へ回していく。〔5回〕)

歌詞：あいこで おちゃらか ほう

(全員腰に手をあてる。)(両手をグーにして回す。)(保育者とじゃんけんをする。)

慣れてきたら、リレーで手を叩く部分を、肩を叩く、足を鳴らすなどに変えていく。

※写真1、写真2、写真3について学生から掲載の許可を得ている。

(2) わらべうたの遊び方アレンジを考えた学生らの感想

<p>• 感染予防バージョンのわらべうたを考えるのも色々なアイデアが浮かんできて自分自身楽しかったです。触れ合えないのは残念だけれど、できる範囲で楽しむ工夫を考えるのは大切なことだと感じました。また、子どもたちと一緒にどんな振り付けが良いかなどを考えたらもっと楽しそうだと思います。</p>
<p>• 感染症対策のわらべ歌のアレンジを考えるのは難しかったけれど、子どもたちの様子を想像しながら考えるのが面白かったです。</p>
<p>• 直接は触れ合えなくても心が触れ合えるように、対策をしっかりとって新しい形で遊ぶのも本来のわらべうたとはまた違ったわらべうたとして楽しめるのではないかと考えた。</p>
<p>• 感染症の対策をしながら、わらべうたで遊ぶことはなかなか難しいと思いました。</p>
<p>• わらべうたの動きのアレンジをいろいろ考えてみたけれど、より楽しくするという事を考えると、どうしても接触が増えてしまうと感じました。友達と触れ合ったり、保育者と触れ合うことで感じることもあるので、早く治療薬が出されて、治ることを改めて願いました。</p>
<p>• 自分で考える時、どのくらいが難しくないか、シンプルすぎて飽きてしまわないか、その2点を考慮しながら考えるのはとても難しかったです。子どもたちの動いている姿を頭で想像しながら考えるのは楽しかったです。</p>
<p>• 感染対策バージョンのわらべうたも、考えたらどんどん出てくると思うので、コロナ禍だからと言って触れ合える歌をやめるのではなく、今回のように別の形でわらべうたをできたら楽しいなと思いました。普段とは違う、距離を保った状態で行う遊びも、子どもたちにとって新鮮でおもしろいものになるのではないかと感じました。</p>
<p>• 身近にあるわらべうたにも工夫が必要になることを知って、コロナ恐るべし... と思ってしまいました。</p>
<p>• 元の遊びを真似ようとしてうまくいかなかったりそこでアイデアを出しにくくしている自分もいた。しかし、意外と難しく考えようしない方が遊びを想像しやすいと感じた。実際に考えていく中でこうしよう、ああしたいと感じる部分も多くあった。これらのことから、わらべうたは汎用性があると感じた。今後もコロナ禍での保育は継続していくと思うので、わらべうたを学習するとともに、その遊び方も工夫して子どもたちが楽しめる保育を作ることができるようになりたい。</p>
<p>• わらべうたは友だちや先生との関わりを楽しく行うものが多いので、感染症対策として考えると接触もできないし、近づくことも危険ということでどのように工夫をすればいいのか悩みました。</p>
<p>• もともと近い触れ合いがあるわらべ歌ですが、今のご時世で距離をとる中でもどうしたら楽しめるのか、考えるのが難しく、そしてよい学びになりました。</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 距離をとる中でもわかりやすく楽しく子どもたちとわらべ歌を楽しめるようにしたいと感じました。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもたちに「距離をとってね」と伝えるのではなく、「大きく手を広げてお隣さんとぶつからないように」という表現などを用いて距離をとっていき声掛けをしていくことが必要で、わかりやすく伝えられるのではないかと考えました。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• なるべくみんなで楽しめたり、体を動かしたりできるような工夫をした。同じ曲でも様々な工夫の仕方があると思うので、子ども達が飽きずに楽しめるような動きをもっと取り入れられるようにしたいなと思った。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 物理的な距離が離れていてもわらべうたを同じ空間で一緒に歌うことで楽しいという感情を共有することはできると思った。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>• このような状況だからこそできる新しい遊び方や、工夫で子供たちもより楽しくわらべうたで遊ぶことができると思いました。</li> </ul>

### (3) 考察

遊び方を考えた学生からは、「できる範囲で楽しむ工夫を考えるのは大切なことだと感じた。」「子どもたちと一緒に遊び方を考えたら楽しそうだ。」「物理的な距離が離れていてもわらべうたを同じ空間で一緒に歌うことで楽しいという感情を共有することはできると思った。」「元の遊び方を意識しすぎない方がアイデアが浮かんだ。わらべうたには汎用性があると思った。」といった感想が寄せられた。また、「子どもにとって難しすぎず、ちょうどよい面白さを考えることに苦勞した。」「より楽しくするというのを考えると、どうしても接触が増えてしまうと感じた。」など、子どもたちの様子を想像しながら、子どもたちに寄り添い、愛情を持って遊び方を考えている姿も見られた。

学生の遊び方アレンジ例として挙げた「なべなべ」は、棒を使って、子どもたちのソーシャルディスタンスを確保する工夫を考えていた。「やわらかい素材を使って棒を作る」とのことであるが、新聞紙や、市販の棒型発泡スチロールという方法を考えることができるだろう。「ずいずいずっころばし」は、わらべうたを使ったお遊戯のようなもので、歌に合った振り付けがある程度決められている。他にも、このようにお遊戯のような遊び方を考えた学生は多かった。「おちゃらか」は、手合わせの代わりに、1拍ずつ手を叩き隣の人へ回していく部分が特徴的である。リレー形式でうまく回すためには、全員がリズムにのって、ある程度の緊張状態を保つ必要があり、実際にやってみると意外と難しいと思われるが、手をつなぎ触れ合うことができないという状況の中で、心をひとつにして遊ぶことができると言えるだろう。学生たちもソーシャルディスタンスが必要な生活を強いられているからこそ、子どもたちを楽しませたいという気持ちを持って自然に考えることができたのではないだろうか。

しかし、残念だったのは、学生らもまた自粛生活で、これらのアイデアを基に実際に遊ぶことができなかったということである。筆者は、同じように感染症対策用に遊び方をアレンジしたわらべうた遊びを保育園児と共に試したところ、思いがけない部分でうまくいかないことがあった。今回、学生らが想像力を働かせて子どもたちのことを考えながら一生懸命考えた案であるが、学生同士で実際に遊んでみると、更に多くの改善案や発展案が見えてきたことだろう。また、学生らは多くのわらべうたを知らないため、まずは書籍やインターネットを使用してわらべうた遊びを調べ、共有し合うことから始めたが、学生自身にも、アレンジ以前の一般的な遊び方で、触れ合いながら多くのわらべうたで遊ぶ機会を持たせてあげなかったと思う。

## 4. まとめ

今、世界中で感染症対策を意識した新しい試みが発信されている。保育で多くの友だちと関わりを持って遊ぶことのできる環境において、感染症対策のために触れ合いの多いわらべうた遊びを一斉に中止するのではなく、新しい遊び方や工夫次第で、目と目を合わせ、心を通わせ遊ぶことが可能ではないだろうか。一人で遊ぶことのできる「手あそび」「指あそび」等も、誰かと一緒に同時に遊ぶことで楽しさは倍増するが、触れ合いの多いわらべうた遊びには更に魅力的なものが多い。

今回の取り組みでは、感染症対策下においてもわらべうた遊びで心のつながりを楽しむことができるよう、応急的に遊び方のアレンジを行ったが、やはり実際の触れ合いから感じ学びとることは多いだろう。子どもたちは手をつないで輪になり歩くだけでも楽しく、更に感情や身体力の加減をコントロールする経験を重ねることができる。「なべなべ」でうまく半回転できず、手が絡まってしまい笑いあったり、「おふねがぎっちらこ」で力加減がうまくいかずお友だちと重なり合ってしまったたり、「おしくらまんじゅう」で頬を寄せ合い声を揃えて歌ったりするなど、日常生活にあまりない触れ合いの仕方を伴う遊びは、現代の子どもたちにとって、更に意義深いものになっていく。また、わらべうたは世代を超えて触れ合うことのできる貴重な遊びである。新型コロナウイルス感染症の蔓延は未だ収束の兆しが見えず、保育における音楽活動はしばらく感染症対策を意識する必要があるだろう。子どもたちが安心して触れ合い頬を寄せ合っただけで遊べるような穏やかな日常が戻ることを願う。

### 引用文献

- 1 文部科学省「新型コロナウイルス感染症に対応した小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における教育活動の再開等に関するQ&A（令和2年3月26日時点）」
- 2 文部科学省「新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～（2020.12.3 Ver.5）」
- 3 学習支援コンテンツポータルサイト（子供の学び応援サイト）：文部科学省（mext.go.jp）（2021年2月取得）
- 4 文部科学省「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集 令和2年5月13日時点」
- 5 Zoom Video Communicationsが提供するオンラインミーティングツール。
- 6 Googleが提供するオンラインミーティングツール。
- 7 松井いずみ（2020）「わらべうたを使用した音楽表現活動の提案—保育を学ぶ学生らと共に—」『明星大学教職センター年報 第3号』明星大学教職センター、pp.26-27.
- 8 同上書、p.29.
- 9 小泉文夫（1986）『子どもの遊びとうた わらべうたは生きている』草思社、p.96.
- 10 同上書、p.124.
- 11 木村はるみ（2019）『わらべうたと子どもの育ち』エイデル研究所、p.204.
- 12 同上書、p.157.
- 13 同上書、p.214.,p.223.

### 参考文献

- ・永田栄一（1981）『幼稚園・保育園・お母さんのための 日本のわらべうた遊び35』音楽之友社
- ・コダーイ芸術教育研究所（1997）『いっしょにあそぼう わらべうた—3・4歳児クラス編—』明治図書出版
- ・コダーイ芸術教育研究所（1997）『いっしょにあそぼう わらべうた—5歳児クラス編—』明治図書出版
- ・木村はるみ・蔵田友子（2009）『うたおう あそぼう わらべうた—乳児・幼児・学童との関わり方』雲母書房
- ・小島律子、関西音楽教育実践学研究会（2010）『学校における「わらべうた」教育の再創造—理論と実践—』黎明書房